

久野 宗先生 追悼のこぼ

東北大学大学院生命科学研究所脳機能解析分野
八尾 寛

日本生理学会評議員・久野宗先生（京都大学名誉教授）は、平成21年3月26日、80年の生涯を閉じられました。そして、こよなく愛された、京都は、哲学の道に程近い法然院に永眠されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

久野先生は、ご本人の膨大な業績のみならず、研究の同僚、大学関係者、学界関係者などを含むさまざまな人に及ぼした有形、無形の影響を通じて、生理学の発展に貢献されました。しかし、先生の業績について語ることは、先生を追悼するのにふさわしくないと考えます。先生を語るにあたり、以下の3つのキーワードをあげたいと思います。

(1) 「人生第一、研究第二」

研究室では、先生は常に楽しそうにしておられました。日常の些細な研究成果も面白がっておられましたので、時間を忘れてディスカッションに花が咲きました。論文もまた、楽しんで書いておられました。当時の論文図は、ほとんど手書きでしたが、大好きなマティニを飲みながらお宅で仕上げてもらったことを思い出します。また、講義も楽しんでおられました。ある時、アメリカの学会へ行ったおりに、肺の模型を手に入れてもらえ、吸気時の胸郭内圧が大気圧より低いことや気胸のメカニズムを学生に具体的に教えることができると、嬉しそうに話しておられました。テニスをこよなく愛し、毎週金曜日の午後には、研究室のスタッフや大学院生と汗を流しておられました。テニス終了後のビールも楽しみにしておられました。京都におられる時は、春は花見、夏は大文字の送り火、秋はハイキングとソフトボール大会、冬は忘年会と、研究以外の行事にも欠かさず参加しておられました。家庭においても、よき父



であり、よき伴侶であったと聞いています。週日は、午後6時から7時ごろには、必ず帰宅されました。木曜日は、夕食を作らなければならないということで、さらに早く帰宅されていました。医化学第二講座の故沼正作教授とアセチルコリン受容体の研究を共同でされておられた時に、沼教授が深夜でも電話をかけてくるとこぼしておられました。久野先生のほうから、沼教授に夜中は対応しないと告げられたそうで、それからは、そのようなことはなくなったそうです。「私は、自分に対しても、家族に対しても、共同研究者に対しても、個人の尊厳を傷つけるまで研究に没頭することはできない。」先生は、このように述べておられます。先生にとり、研究は幸福を追求する手段の一つであったといえます。

(2) 「研究は“problem-oriented”でなければならない」

先生は、常日頃から、研究は“problem-oriented”でなければならないと言っておられました。同じ方法論を用いて、研究対象を変えていく研究を

“method-oriented”であると言って、自分の目指すスタイルではないと批判されました。では、“problem-oriented”な研究とは、どのようなものでしょうか。先生は、しばしば、Stephan Kuffler博士の研究を引き合いに出されました。未知の問題を常に見据え、それを解決するのに最適の材料や方法を選択するというのが、“problem-oriented”な研究の特徴です。したがって、ほとんどの場合において、新しい研究法の開拓を余儀なくされます。そのような研究法は、程度の差こそあれ、ブレークスルーとなり、科学の発展に貢献するものになります。しかし、“problem-oriented”な研究は、一所不住であるともいえるので、権威とは相いれない関係にあります。久野先生も権威からは、ほど遠い人でした。また、当時の久野研究室の論文の数が少なかったのは、“problem-oriented”のゆえだだと思います。大学の研究がインパクトファクターの合計で評価される現在では、到底ラボの経営が成り立たなかったと思われる。しかし、常に大きな未知にチャレンジする研究は、それなりの緊張感のある楽しいものでした。

(3) 「Strong Inference」

研究を行うにあたり、常に仮説を立て、それを実験的に検証する態度が重要であるというのが、先生の持論でした。したがって、「…の効果を調べる」「…についての観察結果を記述する」という論理の組み立てを批判されていました。この考えを敷衍するのに先生が使っておられたのが John Platt の “Strong Inference” です。“Strong Inference” については、私が以前に本誌 (61 巻 6 号 233-244, 1999) にご紹介したこともあり、また、久野先生ご自身も本誌 (61 巻 11 号 404-405, 1999) に「“Strong Inference” についての私見と経験」と題されるエッセイを掲載されているので、ここで、詳細を述べることを避けます。ただ、今あらためて、このエッセイを読むと、科学とはどうあるべきかということについて、先生が常日頃から自問自答されていたことがわかります。しかし、決して、自分の考えを人に押し付けることはなさいませんでした。先生は、また、次のようにも述べておられます。「私にとって、研究は個人レ

ベルでの一種の芸術である。」人間の思考の美しさを大切にしておられたといえます。

私が先生を存じ上げていたのは、昭和 55 年に京都大学に赴任された時から退官されるまでの 12 年間にすぎません。お若い時から、先生がこのような卓越したものの見方をしておられたとは思われません。人間は、経験を積み重ねながら、また、多くの人の影響を受けながら、独自の境地を切り開いていくものです。拙文を読まれた人が、好くも悪くも何らかの印象をもたれたならば、先生は花散る桜の下で、さぞかしにっこりとほほ笑んでおられることだろうと思います。

久野 宗 (くのもとい) 略歴

昭和 3 年 8 月	満洲国に生れる
昭和 29 年	京都大学医学部卒業
昭和 35 年	医学博士 (京都大学)
昭和 42 年	ユタ大学医学部助教授
昭和 48 年	ノースカロライナ大学医学部教授
昭和 55 年	京都大学医学部教授
	ノースカロライナ大学医学部客員教授
昭和 56 年	岡崎国立共同研究機構生理学研究所客員教授 (併任)
平成 4 年	京都大学名誉教授 岡崎国立共同研究機構生理学研究所客員教授名誉教授
平成 5 年	シオノギ製薬株式会社顧問 (~平成 7 年)
平成 6 年	国際生理科学連合 細胞・分子神経科学委員会委員長 アメリカ合衆国芸術・科学アカデミー外国人名誉会員
平成 10 年	科学技術振興機構戦略的創造研究推進事業 (CREST)「脳を知る」研究領域統括 (~平成 17 年)
平成 21 年 3 月	死去

久野先生は、日本生理学会では常任幹事、会則委員 (委員長)、動物実験委員、研究倫理委員を歴任されました。また、国際生理科学連合では細胞分子神経科学委員会委員長を平成 6 年から務められました。